
丸山美由紀 モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルト ピアノソナタ集

アトリエフラウ / ATFR-1117

モーツァルトの「ピアノソナタK.330」、愛くるしい軽やかステップ。オーソドックス・アプローチ、お手本解釈。理に適う説得力、音の響き・コンビネーション、ピアニストのコダワリ。疾走コマネズミ、早送りネグレクトなし、堅実な対応、一音とも疎かにせず。音色に趣向を凝らし拘るコトなし、澄み切ったクリスタルトーンや、エンゼル翼のモーツァルト・トーンとは無縁。

「悲愴」、真正面から真摯に向き合い、演奏家の今在る音楽性で再構築した演奏。1楽章、オーソドックス真っ直ぐら、冷静マッシグラネームバリューに押されての気負いや、グールドさんばりのデフォルメ耽溺なし、また定説を翻しての過小評価ベタ表現でもなし。2楽章、肩に力みなし雰囲気作りの色気ナシ、今迄学んできたコトの総決算、音楽に対する優しさを以て。3楽章、この曲で全てとの完結モードでなく、将来の発展を見越す期待を約束したモノ。

シューベルトの「ピアノソナタD.664」、速さの中に雄弁さ、シッカリ密度。伸び伸びシミジミたる、作曲家特有のゆったり路線に非ず。フルタイムにアトラクティブ、冗慢で集中力を殺ぐコトはしない。2楽章、音楽の楽しさの真っ只中、闊歩する嬉しさに満ちて。充実の歌に充ちた空間に浸る喜びを感受。

演奏を聴いていて、自分の無知さ加減を痛感すること多々。曲がどんなツクリなのかアナリーゼなど基本的素養が欠如、作曲家や作品の背景も不勉強。単に耳と頭だけが頼りという覚束無さ。私にとって演奏家の解釈で作品を理解するのみ、不甲斐ないけど仕方なし。今回のCDを通して、音楽に素直に相対できたコトにすごく感謝。

モーツァルト：ピアノソナタ 10番 ハ長調 K.330>

ベートーヴェン：ピアノソナタ 8番 ハ短調 Op.13「悲愴」

シューベルト：ピアノソナタ イ長調 D.664
